浦賀文化

［今月の題字は、夏を表す空色です］

平成17（2005）年6月1日
創刊号
Email：uragabunka@yahoo.co.jp
ホームページ開設準備中

編集・発行：横須賀市浦賀文化センター　〒239-0822 横須賀市浦賀町7-1　電話＆ファクス 046-842-4121（毎月1回発行）

『浦賀文化』創刊によせて

歴史遺産を保存・研究
郷土資料館としての役割を

芦澤雄一課長

おりから一昨年にペリー来航百五十年、再来年に市制百周年という狭間の今年、文化センターの広報紙が船出しようとしている。

そもそも当文化センターの設置目的を敷衍すると、建設当時（昭和五十七年）、「近代日本の幕開けの地である歴史の町浦賀は、現在でも江戸時代の家屋が多く存在し、三浦半島において唯一むかしの面影を残しており、歴史的資料や史跡地が多く遺存しており、伝統ある地域文化の維持・発展に心よせる人々が多い。横須賀市内でも際立って特色をもつ浦賀に、その伝統文化の伝承と新しい文化の創造に関する住民活動の拠点施設を、次の目的で建設し、その振興を図ることが目指された。施設の位置づけは①浦賀及び周辺の歴史・文化に関する啓蒙及び学習の場、②旧家等に所蔵される歴史・民俗資料等の活用の場、③浦賀及び周辺地域に関する資料等の収集、④地域住民の文化活動の場とされた。

常設展示室と閲覧室、大中小三つの学習室を完備

温故知新、益々歴史の価値が重要となっている昨今、浦賀地域に止まらず横須賀市全体の文化の源・郷土の資料館として、文化センターが多くの市民から一層ご利用いただけることをお願いし、併せてセンターの更なる充実を目指す一歩として本誌がその一翼を担うことを心から願います。（芦澤雄一・市教委生涯学習部生涯学習課）

文化センターの歴史

公民館の常設展示施設
浦賀ドック表倶楽部の跡地に

浦賀文化センターが建っているところを字名で「洞井戸（ぼらいど）」という。現在の文化センターより少し奥に入った場所に洞穴から湧き出てきた水をうける箱井戸があったことに由来した地名である。この井戸は関東大震災でも涸れることがなく近隣の人々の生命線であったと聞く。

ここに浦賀ドックの迎賓館であった表倶楽部の建物が建っていた。倶楽部の建物はドックだけでなく、町の社交場としても使われることが多々あった。

この地に浦賀町として待望していたプールが開かれることになり、その管理棟の建物に通年使用できる公民館の附属施設が併設されたのが「浦賀文化センター」であった。

建設にあたっては、もう少し大きな建物にして地域住民の方が利用できるものも併設できないものかという要望もあったが、この地が明治時代の造成によってできた地であったので、現在のものより大きな建物を建てることは断念せざるを得なかった。

昭和五十七（一九八二）年四月、浦賀地域の歴史と文化に関する学習の場として、横須賀市で最初の本格的な常設展示室を持つ浦賀文化センターはオープンした。この年の七月には最初の特別展である「海つきの村―鴨居の漁具とその生活」が開催された。

その後、五十九年に開催された「幕末の浦賀与力・中島三郎助の生涯」を契機として、常設展示室に中島三郎助資料室が増設され、現在に及んでいる。（山本詔一・横須賀市浦賀文化センター・スーパーバイザー）

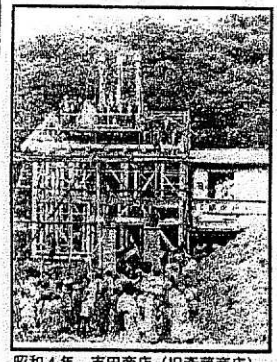
編集部：山本詔一氏は、平成十七年四月、横須賀市生涯学習財団の委嘱をうけ、浦賀文化センターのスーパーバイザーに就任した。

町内の歴史

浦賀七丁目（洞井戸（ぼらいど）・谷戸）
「語る人」吉田寛さん（吉田商店）

三代目は、米、酒、味噌、醤油、などを商いながら、浦賀七丁目の変遷をみてきた。ドックが登り坂のころは「店に入れないほど立ち飲みが流行った」と語る。

「新造船が船台を滑り降りると湾内に津波が起こり、海岸の倉庫は水浸しになった」が、それでも文句は言わなかった。ドックあっての町だったのである。町内の芹沢さんは、そのころ「はじめて生ハムというものを食べた」と当時を懐かしむ。進水式のパーティーが終った後、会場に忍び込んだ子供たちの眼前には、チーズやサラミ、メロンなどのご馳走がたくさん残っていたのだ。

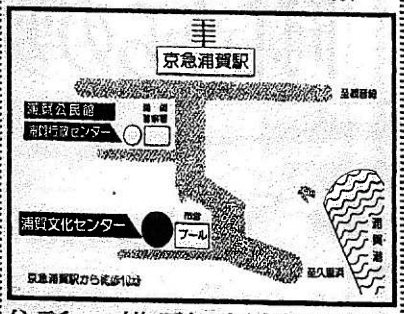

昭和4年、吉田商店（旧斎藤商店）の建前にはたくさんの人が集まった

傍らの田代さんは、七丁目の自慢は団結力だと話す。「健民運動会で、七年間連続優勝しました」と誇らしそう。

七丁目の自慢は「団結力」です

洞井戸の名のとおり、町内には洞や井戸がたくさんあったが、宅地造成で地下水の流れが変わった。吉田さんの家の裏山の弁慶蟹は、岩の水分が枯れていなくなった。（中村、長島）

郷土資料館
浦賀文化センター
（浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分）



住所　：横須賀市浦賀町7-1
電話
ファクス：046-842-4121

東西風

幕末とよばれた一八五〇年代、東アジアは西欧植民地主義の襲来にゆれた。アヘン戦争の敗北に端を発した清朝の瓜分、ムガール帝国の崩壊など西洋がもたらした衝撃は甚大だった。浦賀もペリーの来航でそのうずに巻き込まれる。この意味で、私たちの郷土は西からの強風に翻弄されながら世界とつながっていたといえよう。広報紙『浦賀文化』は、西洋の衝撃とは反対に、ちょっと大げさに表現すれば、三浦半島の天然の良港から東風を起こそうとする小さな試みである。もちろん、入り江をはさんで東西に展開するこの町に心地よい風を吹かせたい、という編集者の願いがこめられているのは云うまでもない。（中村）

発行：郷土資料館 浦賀文化センター　浦賀文化　☎046-842-4121

案内

●中島三郎助常設展示
浦賀文化センターでは、ペリー来航時（前後二回）に応接掛として活躍した中島三郎助の浦賀与力時代、幕府軍として新政府軍と戦い戦死した函館・五稜郭時代の事跡を常設展示しています。あわせて、中島が幕命で建造した洋式帆船「鳳凰丸」の精密模型も展示しています。

●お稲荷さんミニ展示
「あるいて巡る浦賀のお稲荷さん」ミニ展示を当館一階で実施中です。

●東浦賀再発見ミニ展示
「あるいて巡る東浦賀再発見」を当館一階でミニ展示中です。

●ミニ展示『会津藩と浦賀』
四月三十日に開催された咸臨丸フェスティバル「ワンデイミュージアム」にグループ平成浮世なべの協力で出展した。
菅家一郎・会津若松市長、正副議長、市議会議員約三〇名が、山本詔一氏（浦賀文化センター・スーパーバイザー）の説明で展示を見学し、熱心に質問をしていた。市長は、「会津では三浦半島の警備をしていることは知っていたが、直接異国船と接していたとはあまり知られていない。今日はとても良いものをみせてもらいました」とコメント。ミニ展示の一部は、現在、当館で展示中です。

笑話一題

ある日の展示室で、小学生たちが交していた会話です。
カタカタと音のする取っ手のついた昔のたんすを前にして、
「この引き出しに五千万円入っていたらどうしようか」
「覗いてみようか」
「なんだかドキドキするね。もし本当に入っていたら。何を買おうか」
「何かある、紙が見える」
「ううん」
子どもの発想は実におもしろい。そんな展示室を管理している職員にも四月から三人の新メンバーが加わりました。（長島）

情報ください

●浦賀の古い写真
昭和三〇年以前の浦賀の町並みを写した写真をお持ちの方は、差し支えなければお貸しください。複写し、郷土の文化遺産として当センターで保存します。

●「寿座」に関する資料
大正時代、洞井戸にあった「寿座」についての資料を探しています。ご存知の方はご協力ください。

●大衆浴場の写真・資料
明治・大正・昭和における浦賀の大衆浴場に関する写真や資料を探しています。

稿募集 原
投稿を歓迎します。字数は四百～八百字を目安に。優れた原稿は本紙に掲載します。編集部で趣旨を変えずにリライトすることがあります。

収蔵品リスト

●ブラザース号を取り巻く警備船の図（複製）
黒船初来航となった「ブラザース号を取り巻く警備船の図（国立公文書館所蔵）をもとに作製した模型を収蔵・展示しています。
文政元（一八一八）年江戸湾では、鎖国後初めての異国船の来航、船将ゴルドン以下九名の乗組員で交易を求めての来航であった。会津藩は千石船を借り上げ、陣幕をはり応対している。約二百年ぶりの異国船を好奇の目で見る人で浦賀は混乱した。

●船舶模型・絵図
鳳凰丸、咸臨丸、サスケハナ号の精密模型、コロンバス号の絵図を収蔵・展示しています。

●浦賀奉行所模型
浦賀奉行所の精密模型を収蔵・展示しています。

書評

シュリーマン著　石井和子訳
シュリーマン旅行記
（講談社学術文庫　一九九八年）

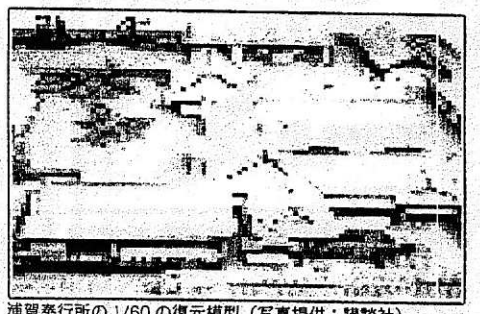
トロイア遺跡の発掘で知られるハインリッヒ・シュリーマンが維新直前（一八六五年四月～九月）、清国経由、横浜、八王子、江戸を訪れ、太平洋を越えてサンフランシスコに至るまでの旅が記録されている。『古代への情熱』などに先立つ著者の処女作だ。
横浜から上陸したシュリーマンは港の人足、街道沿いの茶屋や商家、武家屋敷の情景などを克明に記録した。江戸で銭湯を見学し、「禁断のりんごをかじる前の我々と同じ姿になった老若男女が一緒に湯につかっている。なんと清らかな光景なのだろう」と驚愕しているくだりなどは興味深い。
通商条約締結後は、外国船にかぎり浦賀のお船検めを免除された。著者が上海から乗船した東洋蒸気の北京号も直接横浜に向かい、浦賀を素通りした。
七二〇円＋税（中村）

歴史語らい座・浦賀 ①

郷土史家　山本詔一

同心からの要望　安かった役人の給与

宝暦四年（一七五四）八月、浦賀奉行所の五代目の奉行に興津能登守が就任した。興津はこの時三九歳であり、日光東照宮修復の監督官からの転任であった。就任早々の奉行に、同心たちから給与のベースアップを要望した書類が提出された。
この時代の浦賀の同心は、三斗五升入りの米俵二十俵の扶持米（給与）をもらっていた。これを一石一両という江戸時代の米価基準にあわせてみると年収七両であり、一石は百五十キロであるから、現在の平均的な十キロ五千円の米で換算すると五十二万五千円となる。
最下級の武士をさげすんで、「三ピン武士」というが、これは年収が三両と一人扶持（約二両）しかない武士のことであるが、これと比較しても浦賀の同心の年収七両もいかに少ないものか知れる。同心たちは家族を抱えてどのような生活をしていたのであろうか。
興津奉行宛に提出された文章には、下田時代は屋敷の敷地も六十七坪余あり、家庭菜園などで家計費の出費を抑えることができたが、浦賀では半分にも満たない三十坪しかなく、家庭菜園もままならないと訴えている。
同心の薄給は今に始まったことではなく、奉行が変わるごとにベースアップを訴えてきた。この訴えに耳を傾けてくれた初代の浦賀奉行・堀隠岐守は、伊豆の下田から浦賀へ移転する時には同心一人あたり五両支給し、さらに江戸や三崎勤務をする同心にお手当てがでるように同心四人分の扶持を獲得し、これを分配した。また、二代目の奉行妻木平四郎は享保十五年（一七三〇）に同心一人に二両ずつ配り、三代目の一色宮内の時には同心屋敷が火事の被害にあっており、同心一人に五両が与えられた。さらに興津奉行に代わる前年にはまたしても二両が青山斎宮奉行の力で支給された。
しかし、これらの各奉行の功績がベースアップを要求した書類に別紙として添えられていることから、同心の窮乏ぶりは嘘ではないが、興津奉行の実力を試そうとした同心たちの魂胆が見え隠れする。残念ながら興津奉行がどうような成果を幕府から勝ち取ってきたのか書き残されたものはない。また、同心の本給がベースアップするのはこれから六十五年も後のことである。



浦賀奉行所の1/60の復元模型（写真提供：講談社）